

「イサクの嫁取り物語 2」

2021年02月18日

そこで僕は彼女に駆け寄り、「どうか、水がめの水を少しばかり飲ませてください」と言った。すると彼女は、「どうぞお飲みください。ご主人」と言って、素早く水がめを下ろして、手に抱え、彼に飲ませた。僕に飲ませ終わると、「らくだにも、十分な水を汲んで来てあげましょう」と言って、素早くかめの水を水槽に空け、水を汲みに井戸に走って行き、すべてのらくだに水を汲んでやった。(創世記 24 章 17 節～20 節) すると僕はひざまずき、主にひれ伏して、言った。「主人アブラハムの神、主はほめたたえられますように。主は、その慈しみとまことを主人から取り去られることはありませんでした。そして主は、旅路にある私を主人の一族の家へと導かれたのです。」(創世記 24 章 26 節～27 節)

主人アブラハムの独り子イサクの嫁取りに、アブラハムの故郷である、ナホルの町まで来た忠実な僕は、水を汲みに来た娘リベカに水を求めると、彼女は「どうぞ、お飲みください、ご主人」と言って、飲ませてくれた。僕一人だけではなく、数人の従者がいた。彼らにも飲ませ、更に、「らくだにも、十分な水を汲んで来てあげましょう」と、水を汲みに井戸に走り、10頭のらくだに水を飲ませるまで、井戸と水槽の間を往復した。10頭分のらくだが飲む水の量は半端ではない。彼女は、労苦を惜しむことなく働き、見知らぬ旅の老人に、最大のもてなしをした。僕は、かいがいしく水を汲むリベカの姿を見て、イサクの妻にふさわしい、神は、私の祈りを聞き、主人に慈しみをくださったと思った。そして、重さ半シェケルの金の鼻輪と重さ十シェケルの金の腕輪二つを取り出して、贈った。金の総料は 230 グラムほどで、金が高騰している現在の価格に換算すると、180 万円ほどの贈り物である。初めて遭った人に与えるような贈り物ではない。僕は、「あなたはどなたの娘さんですか。教えてください。お父さんの家には、私どもが泊めていただける場所があるのでしょうか」と問うた。彼女は「私は、ミカルがナホルに産んだ息子ペトエルの娘です。私たちのところには、わらも飼いや葉もたくさんあります。お泊りいただける場所もあります」答えた。なんと、リベカはアブラハムの甥の子・姪孫(てっそん)、イサクのいとこの子・従姪(じゅうてつ)であった。奇跡のように、アブラハムの親戚の娘と出会ったのである。「僕はひざまずき、主にひれ伏して、言った。『主人アブラハムの神、主はほめたたえられますように。主は、その慈しみとまことを主人から取り去られることはありませんでした。そして主は、旅路にある私を主人の一族の家へと導かれたのです。』」僕の心の底からの感謝の祈りである。リベカは母の家の者に告げた。父ペトエルの影は薄く、家の実権はラバンというリベカの兄が握っているようで、彼が取り仕切っている。ラバンはリベカが貰った金の贈り物を見て、旅人は大金持ちであると察し、僕の所に走った。ラバンは金銭に敏感で、裕福な旅人をもてなそうと、「お出でください。主に祝福された方。なぜ、外に立っておられるのですか。泊まる所とらくだの場所を用意しました」と、丁寧に迎え入れた。誘われるままに、僕は家に入り、らくだの荷を解いた。らくだには藁と飼いやが与えられ、僕と従者たちには足を洗う水が出された。そして、食事が運ばれて来た。おそらく、ご馳走であっただろう。僕は「要件をお話するまでは、いただくわけにはまいりません」と言った。ラバンが、「どうぞお話しください」と応じたので、僕は語り始めた。僕は、主人アブラハムに対して、どこまでも忠実である。要件が済まないうちは食事もできないと律儀そのものである。